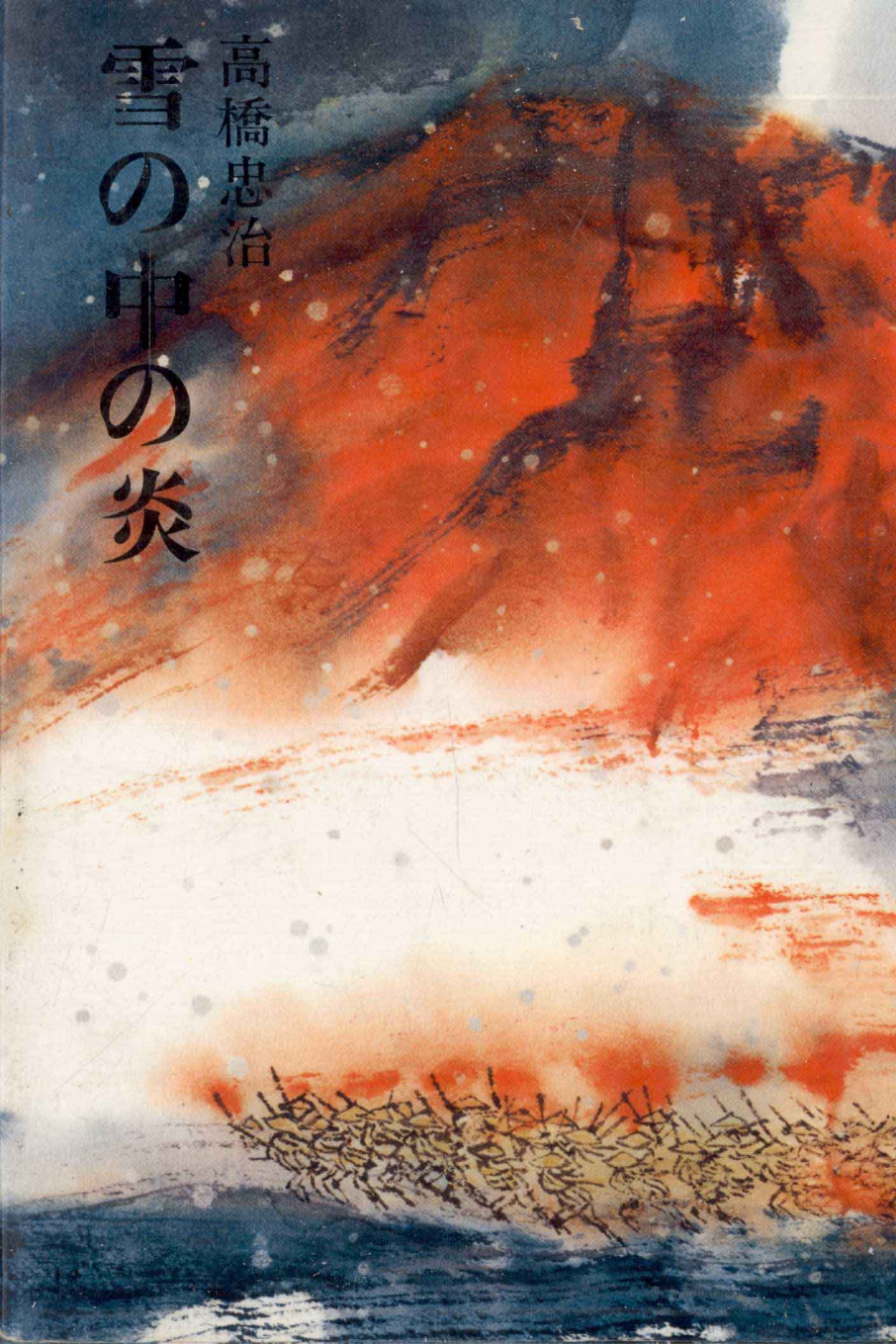


高橋忠治

雪の中の炎



著者紹介

高橋忠治（たかはし・ちゅうじ）一九二七年長野県に生まれる。法政大学卒業。「子どもと文学」を経て、「とうげの旗」によって創作活動をつづけ、現在にいたる。著書に、少年詩集「かんじきの歌」詩集「おふくろとじねんじょ」、長編童話「黒い石の狩人」などがある。日本児童文学者協会会員、「とうげの旗」同人。

現住所 長野市稲里町下水鉋一〇二一五

斎藤博之（さいとう・ひろゆき）一九一九年旧満州奉天に生まれる。帝国美術学校卒業。絵本、さし絵などで活躍中。一九七二年小学館絵画賞受賞。

現住所 神奈川県鎌倉市笛田一七七九一二

雪の中の炎

昭和五十三年二月二十八日 第一刷発行
昭和五十三年六月三十日 第三刷発行

著者 高橋忠治 たかはし ちゅうじ

発行者 小峰広恵

発行所 株式会社 小峰書

東京都新宿区舟町六 一六〇

電話〇三・三五七・三五二 振替東京六〇一九五四四

組版 国際文化交易株式会社

本文印刷 株式会社 厚徳社

表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

製本 小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに表示してあります

NDC 913

高橋忠治

雪の中の炎

小峰書店

もくじ

第一章

馬の鈴……………9

ならずの民三……………31

あばら家の炉端で……………48

張り札……………69

第二章

フクロウの声……………91

墓石をだく……………112

世直し太郎	126
-------	-----

第三章

思案橋	153
午札	174
大英寺のむしろ旗	188

第四章

帰って来た民三	217
念仏講	231
ダビの煙	246
雪原の誓い	266
勝利の大証文	290

第五章

赤鬼^{あかおに}が来た…………… 311

赤いお白州^{しろす}…………… 328

あしたの空は…………… 343

あとがき…………… 360

第
一
章



馬の鈴

1

慶応四年（一八六八）正月十日の朝。北風が吹きあれ、雪は横なぐりにふっている。みのとすげがさ姿の少年が、厚い土塀にかこまれた久保田重右衛門の屋敷前に立つた。

久保田重右衛門は、ここ信州高井郡高井野村きつての大地主で、持ち高は百石に近いといわれている。しかもこの正月には、重右衛門は村人全員の選挙によって名主に当選したのである。

百石の大地主が名主になったとしてもしごく当然に思われるが、十年前までは重右

衛門といえども名主になることはできなかったのである。それまでは名主役は世襲制をとり、梨本・大田・黒田など、堀之内部落に居を構える四軒の旧家が、たらいまわしに就任していたのであった。世襲の名主たちは代官所の役人と手を結び、小百姓の発言を封じたり村の金をちよろまかすことが多かった。

安政四年（一八五七）、小百姓たちの怒りが爆発し、秋祭りの晩を機に村政の改革を村役人にせまり、小百姓をふくむ全村の札入り（総選挙）によって村役人を選出する権利を勝ちとったのである。天領である中野代官所の支配する村の数は、高井郡・水内郡あわせて百三十におよんでいるが、この時期に、名主の世襲制を小百姓の力によって打ちやぶったのは高井野村だけかもしれない。

少年は、表門をくぐると、みのとすげがさはずし、わらぐつの雪もパンパンとはらい落とした。そして黒ずんだ手ぬぐいでぶるっと顔をぬぐうとそれを腰に差し、勝手口の木戸をおした。

「おはようございます。清作でござんす。」

広い土間の入り口で明るい声を立てた。

しかし、屋敷の奥から話し声はもれてくるものの返事はなかった。

——天朝の世になれば、年貢にもお慈悲があるだろう。

——さあ、それはどうですか。いつの世でも百姓はつらいものと決まっておるで。

——いや、こんどは、たいへんな世変わりだで、きっとお情けがあるとわしは信じた
いなの。

重右衛門と組頭の内山織右エ門の声である。

清作は、正月の書き初めに來たときも重右衛門から、「たいへんな世変わり」ということばを聞いた。徳川幕府の將軍が、その將軍の位と天領の土地を天皇に返上することに決まったというのである。もともと日本の国は天皇が治めるべきものでなければならぬ。そのほんとうの姿にもどすというのがこんどの世変わりだ。『王政復古』とも『ご一新』とも言ふのだ——重右衛門は、かしこまっている筆子（手習いの弟子）たちにそう語ったのである。

これが、清作せいさくにあたえられたその日の書き初めはじめての文句もんくであった。

「おはようござんす。清作せいさくでござんす。」

彼は、もう一度、声を高くした。すると、思いもかけず、味噌倉みそぐらのほうから、

「はいはい。」

と、しゃきしゃきしたおかみさんの返事が聞こえてきた。

おかみさんは、背せに十文字じゅうもんじのたすきをかけ、手ぬぐいをねえさんかぶりにしたまま顔をのぞかせた。

「まあまあ、清作せいさくかい。この雪の中をご苦労くろうさんのい。」

「へい、ちいっとおそくなりまして——。」

清作せいさくは、にこっとして頭を下げた。清作せいさくは、重右衛門じゅうゑもんのおかみさんを見ると、ついにこっとしたくなるのであった。

おかみさんはいつもしゃきしゃきしていて、とりすました顔なんか見せない。清作せいさくのような小百姓こひやくしやうのせがれにだって、あいそのいいことばをかけてくれるのであった。年は四十を過ぎすているのだろうが、娘むすめのようにこころと、あけっぴろげに笑わらったり

する。

「きょうの荷は重いでな。それに、こんなにふぶいておって、気のどくだのい。」

「なに、ふぶいていたって、小布施まわりの谷街道を行きますもんで。」

「そうかい。じゃ、たのもうかねえ。——助吉や、中野の安藤さんへおとどけする荷を持って来ておくれ。」

おかみさんは、作男に声をかけた。

六十をこした助吉が、裏からカマスを一袋だきかかえるように運んで来た。

「中はクルミだで、みかけによらず重いぞ。二貫め（七・五キログラム）はあるかな。どれ、しょわせてやるで、そっち向いてかがみな。」

助吉は、背負い縄を荷物のにしりにするりと通した。助吉にしょわせてもらった荷は、ふしぎなことに、中野へ着いてもくずれたりしないのであった。

荷の支度ができると、おかみさんは、

「ほれほれ、ふところに入れて行きな。途中で食べるとうんまいで。」

と、ミカンを三個、清作の手にわたした。

「ごちそうさんです。——安藤さんのほかに、御用は？」

清作は、おかみさんの顔をのぞくように見上げた。

「そうねえ、うちの人からも別に聞いてはいないし——。そうそう、安藤先生から、おたえさんのお薬をもらって来ておくれ。お代は後でわたしがおはらいするからって言うてね。」

「へい。じゃ、行ってきやんす。」

清作は勝手口を出て木戸をしめ、それからみのかさを着けて雪の道を歩き出した。

2

高井野村から代官所のある中野町までは、峠ごえたと二里ほどである。小布施まわりの街道を進むと三里ではきかない。しかし、吹雪の峠ごえはあぶなくもあるし難儀でもある。

清作は、松川沿いにだらだらと西に向かって、小布施へ通じている道を下って行っ

た。

北からの風が強くなり右のほおに、ぺたりぺたりと吹雪の粒がへばりつく。

鼻水もいっしょに飛ばす吹雪かな

そんな句が清作の口をついて出た。

「こりやいい句だぞ。こんど重右衛門さんに見せよつと。」

そうつぶやきながら、清作はつるんと鼻水をすすった。

重右衛門は、手習いといっしょに俳句のてほどもしてくれていたのである。重右衛門の家では、先々代のころ、俳人一茶がたびたびおとずれ、長いこと滞在しては村人たちと句会をもよおしたりしたのである。先々代は一茶に師事し、みずからも春耕と号して句を詠んでいた。そればかりではない。一茶のために屋敷の一隅に離れ座敷を造って師を迎えたほどの熱の入れようであった。

重右衛門もまた俳諧が好きで、手習いの手本に一茶の句を書いて筆子たちにわたすこともあった。